

令和5年度 秋季特別展

亀甲形陶棺

変化と地域性



奈良市埋蔵文化財調査センター

ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER, NARA CITY

はじめに

奈良市では、赤く焼かれた特殊な形態をした棺が数多く出土しており、それらは蓋の形態が亀の甲羅に似ていることから亀甲形陶棺と呼ばれています。亀甲形陶棺は古墳時代から飛鳥時代にかけて製作され、そのつくり方から、埴輪作りに携わった土師氏との関係が指摘されています。

今回の展示では、奈良市が所蔵する陶棺資料を一挙公開し、奈良市出土の亀甲形陶棺の全容をご覧いただきます。陶棺がどのようにつくりられたのか、どのような変遷を辿ったのか、どのような地域性があるのか、考古資料としての陶棺に注目するとともに、横穴墓から出土する副葬品等を通じて、陶棺に葬られた人物像について迫っていきたいと思います。

本展示を通じて、陶棺という遺物について少しでも理解を深める機会となれば幸いです。

1 赤田3号墓出土陶棺蓋

例　言

■本書は令和5年10月2日～12月1日まで開催する、奈良市埋蔵文化財調査センターの令和5年度秋季特別展「亀甲形陶棺－変化と地域性－」の展示パンフレットである。

■パンフレットは、奈良市埋蔵文化財調査センター職員協力のもと、山口等悟が執筆・編集した。

■掲載した写真は奈良市埋蔵文化財調査センター及びアートフォト右文が撮影した。

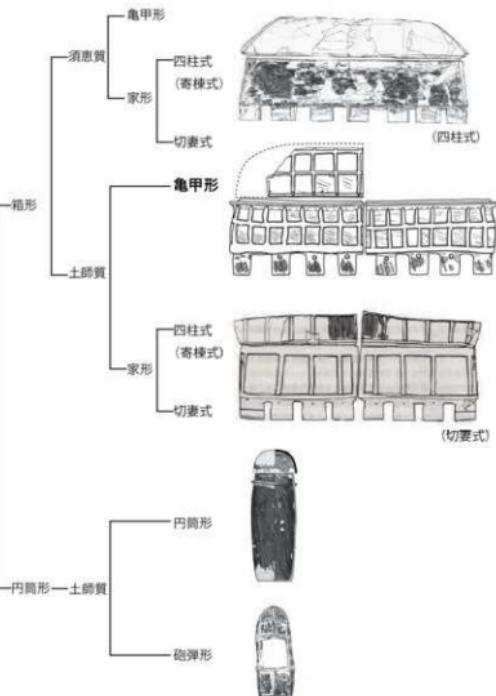
■展示や本書の作成にあたって、下記の協力機関より格別のご高配を賜りました。記して心より感謝申し上げます（敬称略・50音順）。
井手町教育委員会 大後大本宮 岡山県古代吉備文化財センター 鏡野町教育委員会 柏原市立歴史資料館
京都府埋蔵文化財調査研究センター 総社市埋蔵文化財学習の館 津山赤生の里文化財センター 奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 文化財科学研究中心

■本書では遺跡名を「横穴墓群」に統一したため、遺跡報告時の名称と異なる部分がある。

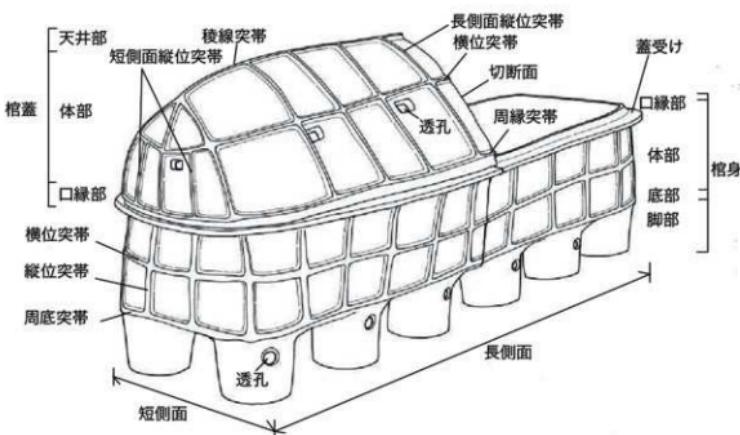
とうかん 陶棺とその分類

とうけつばい
古墳や横穴墓におさめられる棺には、主に木棺や石棺が用いられていますが、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、粘土でつくり焼成した棺である「陶棺」が現れます。陶棺は基本的に棺蓋と棺身の2つに分かれており、身の底部に円筒形をした脚が多数つくのが大きな特徴です。

陶棺は、主に全体形状と焼成方法および棺蓋の形態によって分類されます。多くの陶棺は箱形をしていますが、土師棺からの系譜を想定できる円筒形の例もあります。焼成方法では、酸化焰焼成（酸素が十分に供給された状態で焼成すること）で表面が赤みを帯びる「土師質陶棺」と、還元焰焼成（酸素の供給が少ない状態で焼成すること）で硬質に焼かれ青灰色を呈する「須恵質陶棺」に分かれます。蓋の形態は、亀の甲羅のようにドーム状を呈する「亀甲形陶棺」と、屋根形を呈する「家形陶棺」に分かれ、さらに家形は屋根の形から四柱式（寄棟式）と切妻式に分類されています。



2 陶棺の分類

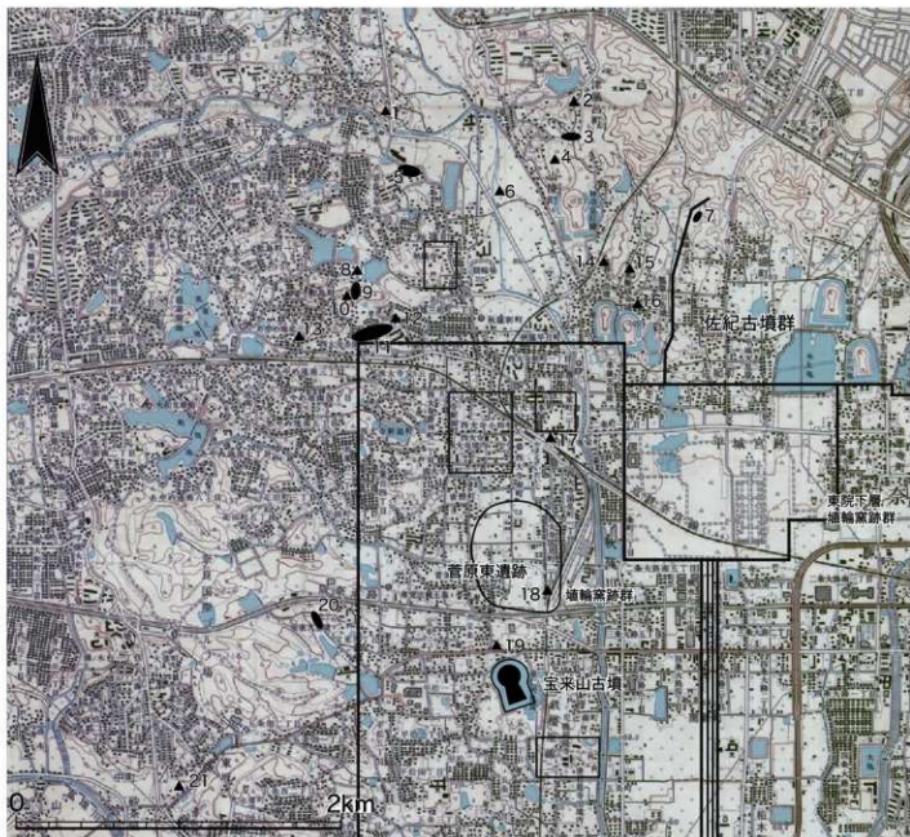


3 亀甲形陶棺の各部名称

奈良市の陶棺

陶棺は全国でおよそ800例が遺跡から見つかっており、特に吉備地域（現在の岡山県）と近畿地方に分布が集中しています。奈良県では約60例の陶棺が遺跡から出土していますが、このうちおよそ4分の3にあたる43例が奈良市内の北西部の丘陵地域から出土しており、陶棺の一大埋葬地であったといえるでしょう。

奈良市を中心に北大和地域で認められる陶棺は、そのほとんどすべてが土師質亀甲形です。そのため、本展示では土師質亀甲形陶棺に着目してテーマを設定しています。



4 奈良市内の亀甲形・円筒形・砲弾形陶棺出土地（番号は表1と対応）

表1. 奈良市内の亀甲形・円筒形・砲弾形陶棺出土土地一覧

番号	遺跡名など	所在地	出土遺構	種類	出土数	所蔵機関
1	中山横穴墓	中山町	横穴墓	亀甲形	3?	橿原考古学研究所
2	津風呂陶棺古墳	山陵町	横穴墓?	亀甲形	1	橿原考古学研究所附属博物館
3	狐塚横穴墓群	山陵町狐塚	1号墓	亀甲形	1	奈良市教育委員会
			2号墓	亀甲形	2	
			3号墓	亀甲形	1	
			横穴墓?		1	不明
4	山陵狐塚 1099-4	山陵町	横穴墓?		1	不明
5	秋篠東山 1180-20 ほか	秋篠町	不明		3	不明
			横穴墓	亀甲形	3	奈良市教育委員会(2023年度調査)
			集落	亀甲形	2	奈良大学
6	秋篠・山陵遺跡	秋篠町・山陵町	1号横穴墓	亀甲形	2	橿原考古学研究所附属博物館
7	歌姫赤井谷横穴墓群	歌姫町赤井谷				
8	敷島町1丁目採集地	敷島町1丁目	不明	亀甲形	1	奈良市教育委員会
9	秋篠阿弥陀谷横穴墓群	秋篠町	1号墓	亀甲形	1	奈良市教育委員会
			2号墓	亀甲形	1	
			3号墓	亀甲形	1	
			4号墓	亀甲形	1	
10	敷島町2丁目採集地	敷島町2丁目	不明	亀甲形	1	奈良市教育委員会
11	赤田横穴墓群	西大寺赤田町1丁目	1号墓	亀甲形	1	奈良市教育委員会
			3号墓	亀甲形	1	
			4号墓	亀甲形	1	
			5号墓	亀甲形	2	
			7号墓	亀甲形	2	
			8号墓	亀甲形	1	
			9号墓	亀甲形	1	
			17号墓	円筒形	2	
			18号墓	亀甲形	1	奈良国立博物館
			21号墓	円筒形	1	
			横穴墓	亀甲形	1	
			横穴墓	亀甲形	1	
12	赤田1号墳	西大寺赤田町1丁目	古墳	亀甲形	1	奈良市教育委員会
			古墳?		1	
13	秋篠三和町2丁目採集地	秋篠三和町2丁目	1号墳?		1	不明
14	新堂寺合葬古墳	あやめ池北3丁目	横穴墓?	亀甲形	2	橿原考古学研究所附属博物館
15	御陵前陶棺出土土地	山陵町御陵前	横穴墓?	亀甲形	1	橿原考古学研究所附属博物館
16	上烟陶棺出土土地	山陵町上烟	横穴墓?	亀甲形	1	不明
17	マエ塚古墳	山陵町御陵前	古墳	亀甲形	1	橿原考古学研究所附属博物館
18	平城京跡第207次	西大寺栄町	条坊闕溝	亀甲形	1	奈良市教育委員会
19	菅原東遺跡	西大寺国見町3丁目ほか	集落・窓跡	亀甲形	多数	奈良市教育委員会
20	平城京跡86年度-23	宝来1丁目8	整地層	亀甲形	1	奈良市教育委員会
21	宝来横穴墓群	宝来4丁目	横穴墓	砲弾形	2	橿原考古学研究所附属博物館
				砲弾形	1	
				円筒形	1	
22	中町陶棺出土土地	中町4992-12	横穴墓?	亀甲形	1	大倭大本宮
				円筒形	1	

陶棺と横穴墓

奈良市の亀甲形陶棺の大半は、墳丘をもたず丘陵の斜面などに穴を掘ってつくった横穴墓から出土しています。横穴墓は古墳のように広い地域で確認できるのではなく限られた地域に集中しており、奈良県下では奈良市内北西部で多くの横穴墓が発見されています。

ここでは、陶棺が出土する奈良市の主な横穴墓について紹介します。

あとだ

赤田横穴墓群

赤田横穴墓群は、奈良市北西部の西ノ京丘陵の南斜面に位置し、6世紀後半～7世紀中頃にかけて造営された横穴墓群です。近年の調査で24基の横穴墓が見つかっており、うち1・3～5・7～9・17・18・21号墓で陶棺が出土しています。



5 赤田横穴墓群（17～24号墓）全景

赤田17号墓（6世紀後半）

17号墓は全長9.3m以上の規模で初葬時と追葬時の床面があり、追葬は木棺を安置していたと考えられます。陶棺は全長212cm、最大幅80cm、高さ97cmと大型で、10行3列の合計30本の脚があり、脚には小さな透孔をあけています。また、蓋の中段と身の短側面にも透孔があります。脚を除く外側全体には朱が塗布されています。棺内には刀子1点が副葬されていたほか、墓室からは土師器壺や須恵器壺が出土しました。



6 17号墓陶棺出土状態



7 赤田 17号墓出土の亀甲形陶棺

赤田 21号墓（6世紀後半）

赤田 21号墓は全長 10.1m 以上の規模で、陶棺 1基、円碟の棺台上に安置した木棺 1基と土師器長胴壺を用いた蔵骨器が出土しました。陶棺は壊され、奥壁側に寄せられた状態で見つかりました。

陶棺は復元全長 208cm、復元最大幅 73cm、高さ 106cm と大型で、脚は 8 行 3 列の合計 24 本あります。蓋の天井部は鍵形に切断されており、全体に朱が塗られています。



8 赤田 21号墓出土の亀甲形陶棺



9 21号墓陶棺蓋の切断形態



10 21号墓玄室検出状態



11 21号墓陶棺出土状態

赤田3号墓（6世紀後半）

赤田3号墓の陶棺は、盗掘の際に大きく破壊されてしまいましたが、全体をおおよそ復元することができました。全長は194cmと推定され、最大幅65cm、脚の配置は8行3列に復元できます。蓋には、小孔を不規則に複数穿っているところが2箇所みられます。また、蓋で上下2段、身で1段の突帶で区切られた方形区画があり、赤と緑の顔料で交互に彩色されていることがわかりました。こうした陶棺は、奈良県内では他に赤田1号墳出土品・天理参考館所蔵品があり、数少なく珍しいものです。



12 赤田3号墓出土の亀甲形陶棺

秋篠阿弥陀谷横穴墓群 あきしの あ シ だ だに

秋篠阿弥陀谷横穴墓群は赤田横穴墓群の北側にある丘陵斜面で近年新たに発見された遺跡です。7世紀前半の横穴墓が4基見つかり、いずれにも亀甲形陶棺が埋葬されていました。



13 秋篠阿弥陀谷横穴墓群全景

秋篠阿弥陀谷1号墓（7世紀前半）

1号墓の陶棺は全長189cm、最大幅60cm、高さ88.5cmで脚は6行2列です。最大の特徴は棺蓋の天井部外面に六つの小さな突起（一つは欠失）があることです。同じような突起がある陶棺は他に例がありません。岡山県定国古墳出土陶棺の中に半環状の突出を認める資料があり、少し似ているものの関連性は不明です。



15 秋篠阿弥陀谷1号墓出土の亀甲形陶棺

秋篠阿弥陀谷4号墓（7世紀前半）

4号墓は玄室の奥壁幅2.0m、長さ3.6mで、陶棺は玄室中央に置かれていました。棺身のみで棺蓋ではなく、埋葬時から蓋がなかったか、木製など有機質の蓋が朽ち果てて残存しなかったものと考えられます。

陶棺身は全長176cm、高さ53cmで脚は6行2列です。棺内からは耳環が1点出土し、棺にその痕跡が残っています。棺外からは須恵器杯・高杯・台付長頸壺が玄室奥側でまとめて出土しました。



16 4号墓棺内出土耳環



17 耳環の棺内出土状態（復原）



18 秋篠阿弥陀谷4号墓出土の亀甲形陶棺

秋篠阿弥陀谷2号墓（7世紀前半）

秋篠阿弥陀谷2号墓出土の陶棺は全長151cm、最大幅56cmで、棺蓋に透孔が多く、脚が5行2列であるのが特徴的です。最も小型化する陶棺脚部の配置が4行2列で、その前段階が6行2列なので、過渡期的様相を示す貴重な資料といえます。棺蓋は通常、水平な作業台の上でつくられますか、本例は棺身の蓋受けの上で棺蓋を製作した非常に珍しい事例といえます。

棺内から耳環が1点、棺外からは須恵器高杯が1点出土しました。



19 秋篠阿弥陀谷2号墳出土の亀甲形陶棺

新たに発見された横穴墓

コラム①

秋篠東山横穴墓

令和5年度に秋篠町で行われた試掘調査で、平城中学校の南側の丘陵から新たに横穴墓が1基発見され、字名から「秋篠東山横穴墓」と名付けられました。墓室の奥壁側から亀甲形陶棺の棺身の一部が倒れた状態で出土しました。棺身の底部が残っており、脚の数は身片側で4行3列ある点から6世紀後半の製作とみられます。この時期の陶棺には棺蓋を鍵形に切るものが見られますが、本例は棺身を鍵形に2分割している点が特徴的です。このような例は他に御陵前出土陶棺で認められます。

また、墓室の墓道側でも亀甲形陶棺が2基見つかっており、追葬が行われていたことがわかります。



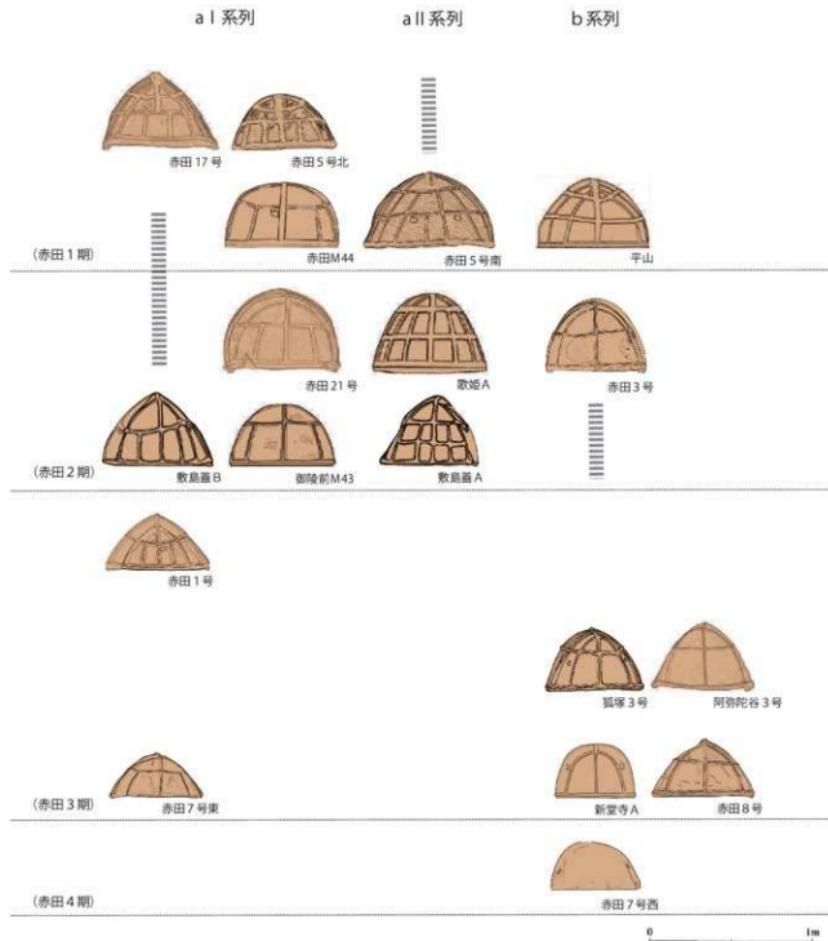
20 秋篠東山横穴墓から出土した亀甲形陶棺



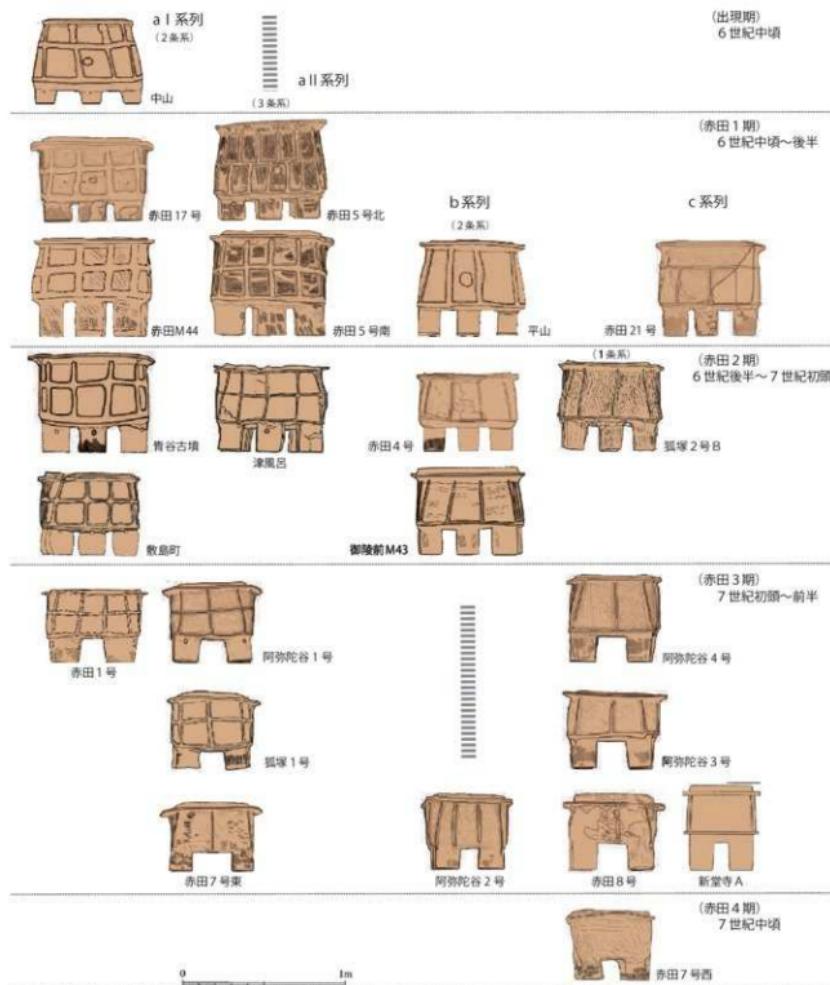
21 鍵形に切られた棺身

亀甲形陶棺の変遷

亀甲形陶棺の蓋と身は突帯の配置から大きく a・b の2系列に分かれており、それぞれが大型品から小型品へ、突帯の条数や脚の本数が多いものから少ないものへと変化していきます。このような陶棺の変遷は、赤田横穴墓群の調査成果から出現期・赤田1～4期の大まく5つの時期に分けることができます。



22 陶棺蓋の変遷（奈良市 2016 を一部改変）



23 陶棺身の変遷 (奈良市 2016 を一部改変)

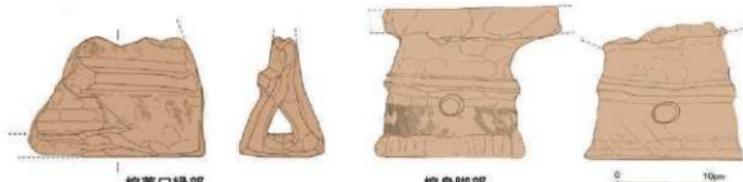
出現期の陶棺

出現期の陶棺は、形象埴輪の基部とよく似た形態の脚部や蓋の口縁端部を大きく拡幅させるなど、北大和地域で定式化する以前の特徴がみられます。

出現期の陶棺は滋賀県草津市の西海道遺跡や京都府宇治市の菟道門とどうもんノ前古墳などに出土例があります。

西海道遺跡（6世紀中頃）

西海道遺跡では、横穴墓ではなく古墳時代の土坑や流路から、陶棺の蓋の破片と脚が出土しています。脚には透孔があけられ、2条の突帯が底部と中位に貼り付けられています。



24 滋賀県西海道遺跡で出土した陶棺（草津氏教育委員会 2013）

中山横穴墓（6世紀中頃）

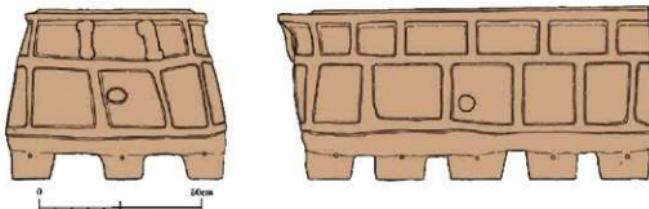
奈良市内では中山横穴墓からこの時期の陶棺が発見されています。全長は約220cm、脚は10行3列の大品に復元され、身の短側面に把手のようなものが取りつき、長側面にも透孔をあける点が特徴的です。



25 中山横穴墓遺物発見状態



26 中山横穴墓で集積された陶棺・土器類
(奈良県立橿原考古学研究所提供)



27 中山横穴墓陶棺身の復元図（鐘方 2019）

赤田1期 -大型陶棺の時期-

赤田1期の陶棺は、幅広突帯を貼り付け、蓋の天井部を鍵形に切断するのが特徴的で、全長2mを超える大型品の陶棺が製作される時期です。

赤田5号墓（6世紀中頃～後半）

赤田5号墓は全長15.7mの規模で、2基の陶棺が玄室の主軸に対して横向きに並んで置かれていました。奥へ先に埋葬された北陶棺は、脚が10行3列で、棺身の短側面に透孔があり、蓋受けが口縁端部と同じ高さに貼り付けられています。一方、南陶棺は8行3列で脚の数が2行分減り、棺身に透孔を穿孔せず、蓋受けが口縁端部から少し下がった位置にあります。



28 赤田5号墓出土北陶棺



29 北陶棺蓋の切断形態



30 赤田5号墓出土南陶棺



31 南陶棺蓋の切断形態

赤田2期 -2系列の陶棺-

2期になると、全長2mを下回る陶棺が多くなり、脚の本数も8行3列または6行3列になります。また、棺身に格子状の突帯が巡るa系列とともに、横方向の突帯を貼り付けないb系列が顕在化していきます。6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられます。

敷島町2丁目陶棺

秋篠阿弥陀谷横穴墓群に近接する敷島町2丁目の宅地造成工事の際に偶然発見されました。脚は6行3列ですが、外側の脚にのみ透孔をあけています。



32 敷島町2丁目から出土した亀甲形陶棺

赤田3期 -小型化する陶棺-

小型化が加速し、脚の数は6行2列になります。赤田3期のなかでも新しい時期のものは棺身の周底突帯を省略し、全長も伸展葬の限界となる150cmほどになります。

赤田1号墓（7世紀前半）

長さ4.3mの横穴墓で、陶棺は盗掘で破壊された状態で見つかりました。外面全体に赤色顔料を塗布しており、蓋には方形の透孔が穿孔されています。



33 赤田1号墓出土亀甲形陶棺

赤田4期 -再葬用の陶棺-

脚の数も4行2列になり、大きさも100～120cm程度と、成人の遺体を伸展状態で納棺できない大きさまで小型化します。子供用の棺にもみえますが、一度埋葬した遺体を白骨化させてから納めた再葬容器であると考えられています。また、赤田4期になると、円筒形や砲弾形の陶棺もつくられるようになります。

赤田7号墓（7世紀前半～中頃）

赤田7号墓には、墓室の奥に2基の陶棺が納められていました。追葬時に納められた西棺は突帯による装飾ではなく、簡素なつくりで、蓋は二つに分かれていますが、身は一体で作られています。



34 赤田7号墓出土西陶棺

中町出土陶棺（7世紀中頃）

中町で新道建設の際に偶然発見されたことが伝わっており、宗教法人大倭大本宮で保管されています。脚が取り付く部分に対応して身の底部に8箇所穴があいており、棺底に脚を接合する際にその穴から指を入れ、脚内面を調整していたとみられます。



35 中町発見の亀甲形陶棺



36 中町出土陶棺底部の穴

陶棺のなかみ

横穴墓や古墳の石室からは、棺とともに被葬者に供えた副葬品や、葬送儀礼に用いたと考えられる土器類が出土します。特に遺体を埋葬した陶棺の棺内には、被葬者が身に付けていたと思われる耳環・玉類などの装身具や、鉄刀・鉄鎌などの鉄製品が納められます。これらは被葬者の性格を考えるうえで重要な遺物です。

副葬品

横穴墓の副葬品は、同時期の横穴式石室と比べやや質素な傾向があるものの、装身具や鉄製品などがあります。なかでも赤田1期の赤田5号墓では、2基の陶棺内から豊富な副葬品が出土しました。土器のほかに、どうしんきんざいんとうまき 銅芯金銀板巻および銀板巻鍍金の耳環や、碧玉製管玉、ガラス玉、鉄刀、刀子、鉄鎌があり、陶棺の西側から多く出土したことから頭を西にして遺体を埋葬していたと考えられます。

一方、赤田3期につくられた秋篠阿弥陀谷3号墓からも銅芯鍍金および銅芯銀板巻の耳環と刀子、鉄鎌などが出土していますが、鉄刀や玉類は出土していません。

横穴墓の副葬品は時期が下るにつれて種類が少なくなり、簡素に変化していることがわかります。



37 赤田5号墓北棺出土玉類



38 赤田5号墓北棺出土耳環・鉄器



39 秋篠阿弥陀谷3号墓出土耳環・鉄器



40 赤田 5号墓陶棺内遺物出土状態

土器

横穴墓から最も多く出土するのは土器で、土師器と須恵器があります。特に須恵器は年代が下るにつれて蓋杯の法量が縮小し、器種組成や形状も変化していくため、横穴墓の年代を知る重要な手がかりになります。

赤田 5号墓では、北棺で須恵器の提瓶、蓋杯、南棺で須恵器の壺、甕、蓋杯と土師器の脚付壺が出土し、蓋杯は口径が 11 ~ 14cm で、体部外表面の半分ほどまでケズリで調整しています。

一方、赤田 3 ~ 4 期の赤田 7号墓では、須恵器の壺、蓋杯、高杯と土師器の甕が出土していますが、提瓶や甕などはみられません。蓋杯は口径 7 ~ 10cm 台と縮小化し、ケズリもみられなくなります。



41 赤田横穴墓群の蓋杯の変遷（奈良市 2016 を一部改変）



42 赤田 5号墓玄室出土土器



43 赤田 7号墓玄室出土土器

陶棺のつくり方

亀甲形陶棺のつくり方には、粘土帯を積みあげて棺蓋と棺身を一体でつくるものと、蓋と身を別でつくるものの2種類があります。このうち奈良市で出土する陶棺は、いずれも蓋と身が別づくりです。身は底部に脚を接合した後、粘土帯を積み上げて体部を製作します。突帯を貼り付けて蓋と身を完成させた後に、それぞれ工具で半分に分割し、乾燥工程を経てから焼成しています。

棺蓋について葉の圧痕

陶棺の棺蓋は通常、平坦な作業台の上で製作します。奈良市で出土する亀甲形陶棺は、棺蓋の口縁部端面に植物の葉脈の圧痕が残っている場合が多くあります。これは作業台の上に裏向けた木の葉を敷いて棺蓋を製作したためについたものと考えられています。

葉脈圧痕の観察から、利用された木の葉はブナ科のナラガシワとみられます。



44 棺蓋口縁部端面の葉脈圧痕（赤田3号墓出土陶棺）

脚のつくり方

棺身は、脚を製作した後にその内部や周囲に粘土を補充して底部と接合し、体部をつくりあげていきます。

脚は粘土紐を積み上げてからハケなどで調整し、透孔を穿孔するという円筒埴輪と同じような製作を行います。外面の調整や粘土紐の積み上げの重複関係などから、脚をひっくり返して倒立した状態で底部と接合していることがわかります。



45 脚の外面調整（赤田3号墓出土陶棺）

※写真は脚の上下を逆で示しています

棺底に孔をあけた陶棺

大型の陶棺の一部には棺の底に径0.5cmほどの小さい孔をあけるものが認められます。棺身の内側から棒状の工具で穿孔しており、脚部の配置に対応させて規則的に穿孔するものと、不規則に孔をあけているものがあります。

小孔をあける理由ははっきりとわかっていないませんが、焼成時の火の回りをよくするために行った可能性が高いと考えられています。



46 棺底に孔をあけた陶棺（赤田5号墓南陶棺）

突帯の板押さえ

棺蓋や棺身の外面には板で押圧したような痕跡が残っていることから、外面の整形に板押さえをよく用いていたことがわかります。

突帯の板押さえは、高さを調整するために行われたものと想定でき、なかには扁平につぶれた形状になるものもあります。



47 突帯の板押圧痕（赤田4号墓出土陶棺）

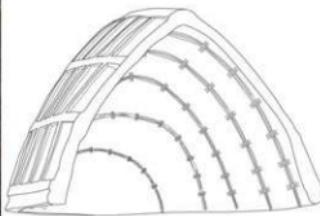
乾燥時の形持たせ

製作が完了した後に陶棺を乾燥させますが、乾燥時の変形を防ぐために内側から形持たせで支持を行う必要がありました。棺蓋の内面には藁縄状の圧痕が残っているものがあり、内側から蓋全体を支持した器具の表面に藁縄のようなものを緩衝材として複数並べ置いた痕跡と推定されます。

一方棺身には口縁部や底部の長側面内側に板や木目の圧痕がみられ、内側から板を当てていた痕跡とみられます。



48 棺蓋内面の藁縄状圧痕（赤田8号墓）



49 棺蓋内面の形持たせ痕跡模式図



50 棺身内面の木目痕跡（赤田5号墓北陶棺）



51 棺身の形持たせ復元図

陶棺の切斷

陶棺は一部を除いて、製作の最終段階に棺蓋と棺身をそれぞれほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用します。赤田1～2期の大型の陶棺では、棺蓋の天井部や棺身の底部を鍵形に切断する例が多くみられます。

陶棺の切断方法には糸を用いる糸切りと、ヘラ状工具を用いるヘラ切りの2種類が認められます。

糸を通すための穿孔（左右で糸切り方向が異なる）



52 棺身底部切断面の糸切り痕

(赤田5号墓南陶棺)



53 棺蓋切断面のヘラ切り痕

(秋篠阿弥陀谷2号墓出土陶棺)

とうせん 陶栓

陶棺の透孔に陶栓を挿入することで、遺体を埋葬した後に陶棺内部を密閉していました。陶栓には円柱形とキノコ形があり、ほかに削り抜いた粘土円盤を焼成して利用したものもあります。陶棺との共伴関係からみて、円柱形陶栓が古く、キノコ形陶栓の方が新しいと考えられています。キノコ形陶栓は厚重で大きいものから軽くて小さいものに変化したとみられます。

なお、陶栓が出土しない陶棺も多く、一般的には木栓を使用していた可能性が考えられます。



55 陶栓

コラム②



54 赤田5号墓北陶棺陶栓装着状態



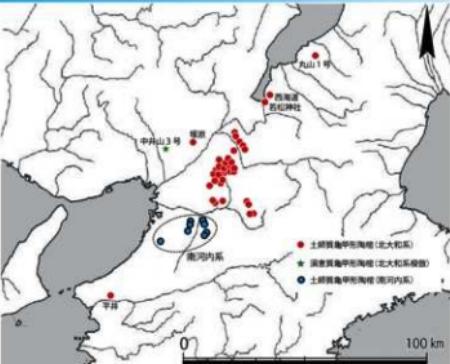
56 秋篠阿弥陀谷3号墓陶栓装着状態

他地域の亀甲形陶棺

南河内地域の亀甲形陶棺

近畿地方では広い地域で陶棺が出土していますが、北大和～南山城地域に次いで土師質亀甲形陶棺が出土するのは南河内地域です。南河内のなかでも大阪府柏原市域には横穴墓群が集中して所在しており、二つの横穴墓群から亀甲形陶棺が出土しています。

南河内地域の亀甲形陶棺は、波状突帯を貼り付ける点や、2分割した蓋の切断面に段差を設けている点、脚を正立状態で接合する点が特徴的で、奈良市の亀甲形陶棺と異なる製作技法を探用していたことがわかっています。



57 近畿地方の亀甲形陶棺分布図

安福寺横穴墓群（6世紀中頃～7世紀初頭）

玉手山丘陵の西斜面に位置する横穴墓群で、北群、南群、北西群の合計40基の横穴墓からなります。なかでも南群1号墓からは3基の陶棺が出土したと報告されています。棺身の脚の数は6行2列と推測され、蓋には突起がついています。



58 安福寺南群1号墓出土の亀甲形陶棺

(柏原市立歴史資料館提供)



59 安福寺南群1号墓の陶棺再発見状態

(柏原市立歴史資料館提供)

玉手山東横穴墓群（6世紀後半）

安福寺横穴墓群から南東へ600mの場所に位置し、同じ玉手山丘陵上に所在します。A～C群からなり、35基の横穴墓が確認されています。採集品として亀甲形陶棺の蓋が1点見つかっています。格子状に突帯が貼り付けられますが、口縁部外面の1段のみ波状突帯がめぐっています。



60 玉手山東横穴墓群で採集された亀甲形陶棺蓋 (柏原市立歴史資料館提供)

吉備地域の亀甲形陶棺

近畿地方とともに陶棺が数多く出土するのが、吉備地域です。吉備地域では陶棺の出土数が全国のおよそ70%を占め、多彩な陶棺が見つかっています。横穴墓を中心に陶棺が出土する近畿地方と対照的に、吉備地域では古墳の横穴式石室に陶棺が埋葬され、8世紀前半まで用いられます。

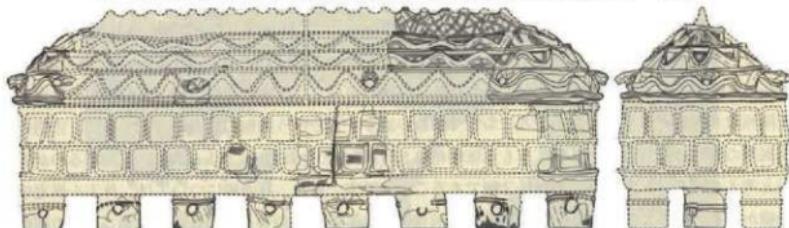
吉備地域の亀甲形陶棺では、棺蓋と棺身を一体でつくり、最終段階で4つに分割する一体づくりが多く採用されます。また、南河内と同様に、蓋に突起があり脚を正立状態で底部に接合する点も特徴的です。

こうもり塚古墳（6世紀中頃）

岡山県総社市南部に位置する全長100mの前方後円墳です。後円部に全長19.4mの長大な横穴式石室があり、家形石棺と亀甲形陶棺が收められていました。石室内からは、金銅装單鳳環頭太刀をはじめ、武器、馬具、玉類、鉄滓などが出土しました。



61 こうもり塚古墳から出土した亀甲形陶棺（岡山県古代吉備文化財センター提供）



62 こうもり塚古墳出土亀甲形陶棺の復元案

長浜2号墳（7世紀前半）

岡山県 鏡野町に所在する直径18mの円墳で、横穴式石室から陶棺2基と鉄鎌、鉤状鉄器、耳環、土器が出土しています。陶棺は蓋に突起がつき、棺身には波状文を多条平行線で表現しています。出土須恵器から7世紀前半の築造と考えられています。



63 長浜2号墳出土の亀甲形陶棺（津山市提供）

奈良市の陶棺にみる他地域の影響

コラム③

南河内地域や吉備地域の亀甲形陶棺は、蓋の突起や脚部の製作技法などが奈良市陶棺と異なり、別の系統の製作者によってつくられたと考えられます。一方で、奈良市出土陶棺の一部には、これら他地域の陶棺の影響を受けて製作されたとみられる資料も存在しています。

鋸歯状突帯のある陶棺片

宝来1丁目などから三角形を連ねた鋸歯状に突帯を貼り付けている陶棺片が出土しています。南河内や吉備地域のような一条の波形の突帯とは異なり、北大和地域の工人が波形を鋸歯文に変えて製作したも

64 鋸歯状突帯のある陶棺片



蓋に突起のある陶棺

赤田9号墓は墓室の長さが5.7mで、中には亀甲形陶棺1基と円筒形陶棺2基が認められていました。亀甲形陶棺は全長117cmで脚は8本、棺身に突帯の貼り付けも行わない小型化した赤田4期の陶棺です。棺蓋には、吉備地域の陶棺にみられるような円柱状の突起が左右についています。



65 赤田9号墓出土の突起のある亀甲形陶棺

北部九州とのつながり

コラム④

赤田6号墓出土須恵器甕

赤田6号墓は構築時に5号墓を壊したために埋葬は行われていませんが、墓道から須恵器などが出されています。そのなかの須恵器甕にはやや特殊な痕跡が確認されています。一般的な須恵器甕には、外面を叩くときに内面へ当てる当てる具の痕跡として同心円文がみられますが、6号墓の甕の内面には横方向の平行の当てる具痕が認められます。

平行の当てる具痕は北部九州産の須恵器甕にみられる特徴で、本例も北部九州から持ち込まれたものだと考えられています（寺井2020）。赤田横穴墓群にみられる平行文当てる具の須恵器甕はこの一点以外に確認されていませんが、横穴墓の被葬者が北部九州と何らかの関係を持っていたことを示しているといえるでしょう。



66 赤田6号墓出土の須恵器甕



67 甕内面の平行文当てる具痕跡

亀甲形陶棺と土師氏

奈良盆地北西部は、古墳の造墓や埴輪生産に関わったとされる氏族・土師氏の故地の一つと推定されており、菅原東遺跡の埴輪窯跡群の発見はそれを考古学的に裏付けています。埴輪のつくり方と共に通する土師質の亀甲形陶棺がこの地域で展開するという現象は、土師氏の動向を考える上で決して無視できないものです。

ここでは亀甲形陶棺や横穴墓と土師氏の関係が垣間見られる資料について紹介します。

埴輪窯から出土した陶棺

菅原東遺跡出土陶棺片

古墳時代後期に埴輪を生産し、奈良盆地の古墳に供給していたと想定されている菅原東遺跡埴輪窯跡群の周辺では、奈良時代の整地層などから埴輪とともに陶棺の破片も出土しています。棺蓋、棺身、脚部へ底部への破片などがあります。胎土や焼成なども菅原東遺跡から出土する埴輪とよく似ており、埴輪と同じ窯で陶棺を生産していた可能性が指摘されています。大阪府の野々上埴輪窯や土師ノ里埴輪窯でも亀甲形陶棺片が発見されており、埴輪と陶棺の間に技術的継承があったことを示す重要な資料といえます。

なお、菅原東遺跡の陶棺片には宝来1丁目出土棺蓋片と同様の鋸歯状突帯を有する資料が認められ、南河内地域の影響を受けて製作されたとみられます。



68 菅原東遺跡埴輪窯跡群の全景



69 菅原東遺跡から出土した陶棺片

陶棺の胎土分析

コラム⑤

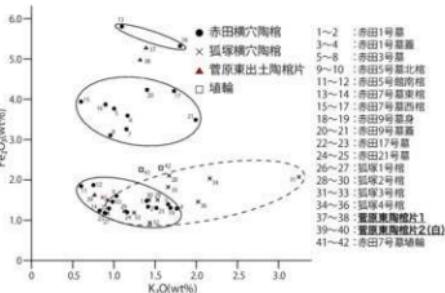
粘土でつくられた陶棺や埴輪は、胎土中の鉱物の組成や元素を分析することで産地を推定することができます。奈良教育大学の金原正明氏、文化財科学研究中心の金原裕美子氏の協力を得て、赤田横穴墓群や狐塚横穴墓群、菅原東遺跡の陶棺資料などを対象に、ハンドヘルド蛍光X線装置による非破壊での胎土分析を行いました。

結果として、赤田横穴墓群の陶棺は1号墓、5号墓、17号墓、21号墓で同じ領域の胎土を示すに対し、3号墓、7号墓、9号墓は異なる胎土を用いていることがわかりました。狐塚横穴墓群の陶棺は赤田5号墓などと部分的に重なるものの、異なる領域とみられます。

一方で、菅原東遺跡出土陶棺には赤田5号墓などと共通する領域の胎土であるものと、そうでないものが確認できました。鋸歯状突帯の有無など形状に違いはありますが、前者は赤田5号墓などと同じ胎土で製作を行っていた可能性があります。



70 蛍光X線分析作業風景



71 陶棺と埴輪の胎土分析図

(文化財科学研究中心提供)

埴輪と陶棺

亀甲形陶棺と埴輪の類似性が指摘されているのは、特に脚のつくり方です。前述したように、脚をつくる際に粘土紐を積みあげてからハケなどで調整し、透孔を穿孔する製作手順は、円筒埴輪のつくり方と非常によく似ています。

また、亀甲形陶棺の突帯や棺身底部外面には、高さを調整したり形状を整えるために板状の工具で押圧を行う場合があり、古墳時代後期の円筒埴輪で観察できる底部調整の押圧技法との関連性を想定させます。



72 円筒埴輪（菅原東遺跡）と陶棺脚部（赤田4号墓）



73 陶棺脚部外面のタテハケと板押圧（赤田9号墓）



74 円筒埴輪底部のタテハケと板押圧（菅原東遺跡）

平山古墳（6世紀後半）

出現期～赤田1期の陶棺の一部には、脚に底部突帯を貼り付けるものがあり、埴輪の製作技法とよく似ていることが指摘されています。奈良市が所蔵する亀甲形陶棺には現在確認されていませんが、奈良市周辺の陶棺資料の中に出土例が存在します。

平山古墳は京都府井手町に所在する直径約20mの円墳で、横穴式石室内から亀甲形陶棺とともに須恵器や鉄鎌、鉄刀、銅製三輪玉、馬具が出土し、6世紀後半に位置付けられます。陶棺は全長237cmの大型品で、棺身に横方向の突帯を貼り付けないのが特徴です。倒立状態で脚に底部突帯を貼り付けており、その内外面を指で押さえた痕跡が明瞭に残っています。



75 平山古墳から出土した亀甲形陶棺脚部

菅原東遺跡（HJ200次）円筒埴輪・形象埴輪基部

古墳時代後期の埴輪には、円筒埴輪の口縁部や形象埴輪の基部に突帯を貼り付ける資料の存在が知られています。菅原東遺跡の埴輪窯から出土した資料のなかには、円筒埴輪の口縁端部や形象埴輪基部の底面に接する形で突帯を貼り付け、指で押さえて整形するものがあり、平山古墳の陶棺脚部とそっくりです。

このような指押さえで底部突帯を整形する埴輪の一群が北大和地域を中心に分布していることからも、菅原の地で埴輪生産に携わった集団の技術が奈良市やその周辺の亀甲形陶棺に受け継がれているのは間違いないでしょう。



76 菅原東遺跡出土の円筒埴輪口縁部と形象埴輪基部

横穴墓に持ち込まれた埴輪

奈良市の亀甲形陶棺は土師氏の本拠地である菅原の地で生産され、埴輪作りの技術との共通性から土師氏と深い関わりをもつことが明らかになりました。それでは、このような亀甲形陶棺をおさめた横穴墓には、どのような人物が葬られていたのでしょうか？

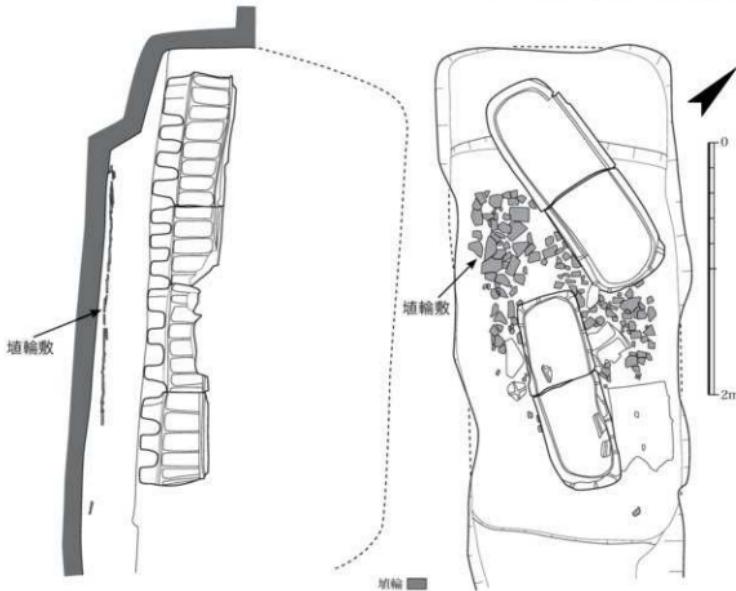
奈良市の横穴墓には棺や副葬品のほかに、墓室や墓道から埴輪が出土する場合がみられるのも特徴的です。埴輪は6世紀末頃には生産が終了していくため、以前につくられた埴輪を持ち込んだものとみられています。

狐塚横穴墓群2号墓（6世紀後半）

狐塚横穴墓群は山陵町に所在し、1～3号の3基の横穴墓が確認され、いずれも亀甲形陶棺を埋葬していました。2号墓からは2基の陶棺が出土しており、陶棺を置いた床面の下層から円筒埴輪が敷きつめられて埋められた状態で見つかりました。古墳時代中期初頭（5世紀初頭）に位置づけられる円筒埴輪で、近くの古墳から抜き取ってきたものと思われます。



77 2号墓の床面に敷かれていた円筒埴輪



78 狐塚2号墓平・立面図

赤田 7号墓

赤田 7号墓の墓室床面でも、狐塚 2号墓と同様に西陶棺の下から円筒埴輪が敷き詰められた状態で見つかりました。古墳時代後期の特徴をもつ埴輪で、横穴墓がつくられた 7世紀前半以前に製作されたものを再利用したとみられます。



79 7号墓西陶棺の出土状態



80 7号墓の墓室床面に敷かれていた円筒埴輪

赤田 19号墓（7世紀中頃）

赤田 19号墓は全長 5.2m の規模で、墓室の中央に長さ 1.67m・幅 0.6m ほどに復元できる木棺が主軸方向に置かれていました。副葬品はありませんでしたが、朝顔形埴輪と人物埴輪が倒れた状態で出土し、墓室の入り口に樹立して置かれていたことがわかりました。埴輪は 6世紀前半頃のもので、底部が欠けていることから近隣の古墳から抜き取って再利用したものとみられます。

亀甲形陶棺の特徴や埴輪の存在から、赤田横穴墓群は土師氏の墓域の一つと考えられます。このような埴輪の再利用も、氏族伝承を再確認するための行為なのかもしれません。



81 赤田 19号墓出土の朝顔形埴輪



82 赤田 19号墓室入り口の埴輪樹立状態（復元配置）



83 赤田 19号墓出土の人物埴輪

陶棺の終焉

全長が1m程度まで小型化する7世紀中頃（赤田4期）以降、奈良市では亀甲形陶棺がつくられなくなります。それと入れ替わるようにして、土器棺と形状がよく似た円筒形陶棺や砲弾形陶棺が横穴墓に埋葬されるようになります。これらの陶棺も大人の遺体をそのまま納めるには小さすぎるため、遺体を骨化させて骨だけを納める再葬容器であったと推測されます。円筒形陶棺や砲弾形陶棺を最後に、近畿地方では陶棺が姿を消します。

最後の亀甲形陶棺？

松井横穴墓群40号墓

京都府京田辺市の尾根に広がる横穴墓群で、6世紀後半～7世紀中頃までの70基の横穴墓が見つかっています。このうち40号墓から、土器、耳環、鉄鏡とともに1基の箱形陶棺が発見されました。

全長約85cmの陶棺は、格子状の突帯を貼り付ける点、切り取った粘土板を焼成して方形孔の蓋としている点で宝来横穴墓群の砲弾形陶棺と類似しています。一方で、平底の底面をもつ箱形である点は砲弾形陶棺と系譜を異にすることを示しており、亀甲形陶棺から変化したものである可能性が考えられます。最後の亀甲形陶棺の姿なのかどうか、さらに検討が必要です。



84 松井横穴墓群40号墓から出土した箱形陶棺

（京都府埋蔵文化財調査研究センター提供）



85 箱形陶棺の出土状態

（京都府埋蔵文化財調査研究センター提供）

円筒形陶棺

円筒形陶棺は亀甲形陶棺と形状が大きく異なり、土器棺からの系譜が想定されます。奈良市で出土する円筒形陶棺はいずれも土師質で、蓋と蓋受けのある平底の身からなり、亀甲形陶棺製作上の影響を受けて作られているとみられます。また、赤田9号墓や中町陶棺出土地では赤田4期の亀甲形陶棺とともに円筒形陶棺が出土しているため、7世紀中頃に製作が始まったと推定できます。

赤田9号墓（7世紀中頃）

7世紀中頃につくられた赤田9号墓からは、小型の亀甲形陶棺と共に円筒形陶棺が埋葬されていました。大小2つあり、大型のものは口径約30cm、高さ約85cmです。小型のものは口径約27cm、高さ約67cmです。いずれも平底で、自立することができます。口縁部から7cm程度下には蓋受けがめぐり、半球形の蓋が載るようになっています。蓋受けには径0.5cm前後の孔が8～20cm間隔であいており、蓋がはずれないよう紐で縛って固定するための紐孔ではないかと推測できます。



86 赤田9号墓出土の円筒形陶棺

赤田 18 号墓（7世紀中頃）

18号墓出土の円筒形陶棺は、蓋身を合わせ口にして横たわる状態で出土しました。9号墓の棺蓋が半球形なのに対して、18号墓例の棺蓋は身とはほぼ同じ大きさのバケツ形になっています。一方で、棺身は9号墓例よりもさらに小さく、砲弾形陶棺に近い大きさです。蓋受けの張出しが弱く、紐穴もありません。蓋の口径が少し小さくて身の蓋受けまで蓋を挿入できないため、やむを得ず合わせ口の状態で埋葬されたと思われます。



87 円筒形陶棺出土状態



88 赤田 18 号墓出土の円筒形陶棺

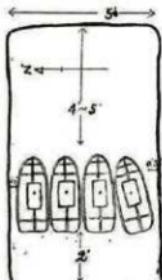
砲弾形陶棺

砲弾形陶棺は、円筒形陶棺と共にしたつくり方を観察できますが、棺身が比較的小さく身と蓋が一体化していることから、円筒形陶棺が小型化していく過程で生まれたものと考えられます。

宝来横穴墓群

宝来4丁目に所在する宝来横穴墓群では、現在までに13基の横穴墓が確認されています。明治時代に4基の砲弾形陶棺が出土したこと、森本六爾によって報告されています。

右写真的資料は全長74.8cm、底部径24.8cmです。平底の底部を粘土円盤でつくり、その上に粘土紐を積み重ね、頂部を丸く収束させて製作しています。外面には格子状に突帯が付加されていますが、方形孔下方の突帯1条は後から付けられたものとみられます。方形孔に被せる蓋は、方形孔を切り抜いた際の粘土板を焼成して再利用したものと思われます。



89 宝来横穴墓群の砲弾形陶棺出土状態
(森本 1924)



90 宝来横穴墓群出土の砲弾形陶棺
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館提供)

展示品目録

遺跡名等	展示品名	所在地	国版番号	点数	所蔵機関
第 1 章 奈良市の多彩な陶館					
赤田 17 号墓	亀甲形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	6,7	1	奈良市教育委員会
赤田 21 号墓	亀甲形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	8,9,10,11	1	奈良市教育委員会
赤田 3 号墓	亀甲形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	1,12	1	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 1 号墓	亀甲形陶棺	奈良市秋羅町	15	1	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 4 号墓	亀甲形陶棺	奈良市秋羅町	17,18	1	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 4 号墓	耳環	奈良市秋羅町	16	1	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 2 号墓	亀甲形陶棺	奈良市秋羅町	19	1	奈良市教育委員会
秋羅東山横穴墓	亀甲形陶棺	奈良市秋羅町	20,21	1	奈良市教育委員会
第 2 章 亀甲形陶棺の変遷					
赤田 5 号墓	亀甲形陶棺（北陶棺）	奈良市赤田町 1 丁目	28,29	1	奈良市教育委員会
赤田 5 号墓	亀甲形陶棺（南陶棺）	奈良市赤田町 1 丁目	30,31	1	奈良市教育委員会
敷島町 2 丁目採集地	亀甲形陶棺	奈良市敷島町 2 丁目	32	1	奈良市教育委員会
赤田 1 号墓	亀甲形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	33	1	奈良市教育委員会
赤田 7 号墓	亀甲形陶棺（西陶棺）	奈良市赤田町 1 丁目	34	1	奈良市教育委員会
中町陶棺出土地	亀甲形陶棺	奈良市中町	35,36	1	宗教法人大坂大宮
第 3 章 陶棺のなかみ					
赤田 5 号墓	玉韁・鉄器	奈良市赤田町 1 丁目	37,38	50	奈良市教育委員会
赤田 5 号墓	須恵器・土師器	奈良市赤田町 1 丁目	42	20	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 3 号墓	玉韁・鉄器	奈良市秋羅町	39	8	奈良市教育委員会
赤田 7 号墓	須恵器・土師器	奈良市赤田町 1 丁目	43	16	奈良市教育委員会
第 4 章 陶棺のつくり方					
赤田 5 号墓	陶栓	奈良市赤田町 1 丁目	54,55	7	奈良市教育委員会
赤田 8 号墓	陶栓	奈良市赤田町 1 丁目	55	7	奈良市教育委員会
秋羅阿弥陀谷 3 号墓	陶栓	奈良市秋羅町	55,56	4	奈良市教育委員会
孤塚 2 号墓	亀甲形陶棺	奈良市山陵町孤塚		1	奈良市教育委員会
マエ塚古墳	亀甲形陶棺	奈良市山陵町御陵前	46	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
第 5 章 他の地域の亀甲形陶棺					
平城京跡 86 年度 -23 測査地	崩壊状突部のある陶棺片	奈良市宝来町	64	1	奈良市教育委員会
赤田 9 号墓	蓋に突起のある陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	65	1	奈良市教育委員会
赤田 6 号墓	須恵器壺	奈良市赤田町 1 丁目	66,67	1	奈良市教育委員会
第 6 章 陶棺と土師氏					
首原東遺跡	亀甲形陶棺片	奈良市首原東町	69	20	奈良市教育委員会
	円筒埴輪		72	3	
	円筒埴輪口縁部・象形埴輪基部		76	10	
赤田 4 号墓	陶脚部	奈良市赤田町 1 丁目	72	3	奈良市教育委員会
平山古墳	亀甲形陶棺脚部	京都府井手町	75	5	井手町教育委員会
孤塚 2 号墓	円筒埴輪	奈良市山陵町孤塚	77	2	奈良市教育委員会
赤田 7 号墓	円筒埴輪	奈良市赤田町 1 丁目	79,80	7	奈良市教育委員会
赤田 19 号墓	朝顔形埴輪・人物埴輪	奈良市赤田町 1 丁目	81,82,83	2	奈良市教育委員会
第 7 章 陶棺の終焉					
板井横穴墓群 40 号墓	箱形陶棺	京都府京田辺市	84,85	1	公益財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
赤田 9 号墓	円筒形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	86	2	奈良市教育委員会
赤田 18 号墓	円筒形陶棺	奈良市赤田町 1 丁目	87,88	1	奈良市教育委員会
宝来横穴墓群	船形陶棺	奈良市宝来 4 丁目	90	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

引用・参考文献

- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2019『百舌鳥・古市古墳群と土師氏』
- 岡山県教育委員会 2023『史跡 こうもり塚古墳』
- 岡山県北房町教育委員会 2001『定東塚・西塚古墳』
- 柏原市立歴史資料館 2017『横穴探求 高井田横穴が見た25年』
- 鎌方正樹 2017「近畿地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第7号 墓輪検討会
- 鎌方正樹 2018「吉備地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第8号 墓輪検討会
- 鎌方正樹 2019「奈良市中山横穴墓出土陶棺の検討」「和の考古学：藤田和尊さん追悼論文集」ナベの会
- 網島 歩 2013「古墳時代後期から終末期における陶棺の分類・編年と系統」『古代学研究』198号 古代学研究会
- 網島歩・前田俊雄・持田大輔 2017「奈良市中山横穴墓の研究」『考古学論叢』第40号 奈良県立橿原考古学研究所
- 草津市教育委員会 2013『西海道遺跡・笠寺庵寺・南笠古墳発掘調査報告書』
- 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018『京都府遺跡調査報告書』第171冊
- 津山市郷土博物館 2013『土の棺に眠る～美作の陶棺～』
- 寺井 誠 2020「雅波など畿内に散入された他地域産須恵器-有文當て具痕跡を基にして-」『共同研究成果報告書』14
大阪歴史博物館
- 奈良市教育委員会 1985『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度
- 奈良市教育委員会 2002『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成12年度
- 奈良市教育委員会 2015『赤田横穴墓群・赤田1号墳』
- 奈良市教育委員会 2022『奈良市埋蔵文化財調査年報』令和元(2019)年度
- 前田俊雄・網島歩 2021『宝来横穴墓群出土陶棺』『森本六爾関係資料集』IV 由良大和古代文化研究協会
- 村上幸雄・橋本聰司 1979「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26卷第2号 考古学研究会
- 宮岡昌宜 2012「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』第59卷第1号 考古学研究会
- 向日市教育委員会 1998『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集
- 森下浩行 1994「土師質亀甲形陶棺小考-北大和・南山城を中心に-」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1993
奈良市教育委員会
- 森本六爾 1924「異形の陶棺を発見した大和國生駒郡伏見村寶來字中尾の遺跡について」『考古学雑誌』第14卷5号
日本考古学会

令和5年度秋季特別展

亀甲形陶棺

-変化と地域性-

展示パンフレット

発行日：令和5年10月1日

編集：奈良市埋蔵文化財調査センター

発行：奈良市教育委員会

印刷：昭文社



Tortoise shell-shaped pottery coffin

-Transition and Regionalism-